

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：32612

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2015

課題番号：26870130

研究課題名(和文)南米アンデス・アイマラ語の口承資料の採録・回復と分析

研究課題名(英文)Registration and Analysis of Oral Materials in the Aymara Language of the Southern Andes

研究代表者

藤田 護 (FUJITA, Mamoru)

慶應義塾大学・環境情報学部・講師

研究者番号：50726346

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：今般の助成を受けたことにより、これまでの調査結果について原文資料の整備・公開及びその分析の双方で重要な進展が得られた。原文資料については、アイマラ語原文の校訂・スペイン語および日本語への翻訳を進め、2015年度より原文対訳の公刊を開始することができた。また、分析についても、20世紀前半のアイマラ先住民運動についてのアイマラ語オーラルヒストリー資料がもつ独自の重要性について、日本及び現地ボリビア双方で学会発表を行い、併せて日本語論文の刊行を行った。また、アイマラ語資料の言語的重要性についてはアイマラ語へのスペイン語からの外来語の取り込みの独自性について分析を進め、国際シンポジウム発表を行った。

研究成果の概要(英文)：Throughout the funding period, we have seen an important progress in the following aspects: (1) transcription and translation of the recorded materials in Aymara into Spanish and Japanese; (2) Analysis of the textual logic and sociopolitical implications of the Aymara texts.

On the first aspect, we were able to start the publication of the Aymara texts and their translation from 2015. On the second aspect, we have analyzed the oral history texts of the Aymara indigenous movement of the first half of the 20th century, and the world views and textual mechanisms that the material contains. This analysis has been presented both in Bolivia and in Japan, and an article published in Japan. We have also conducted analysis on Aymara borrowings of Spanish words, and the specific meanings and usages that these loan words start to acquire in Aymara, whose results were presented in a research seminar.

研究分野：言語人類学

キーワード：口承文学 オーラルヒストリー 言語接触 先住民運動 ボリビア政治

1. 研究開始当初の背景

南アメリカのペルー、ボリビア、そしてチリの一部で話される先住民言語であるアイマラ語は、長年にわたる植民地主義と人種差別的状況を経た現在でも、話者数約200万人をもち、南アメリカではケチュア語とグアラニー語に続く第三の先住民言語である。しかしながら、アイマラ語についての研究は、その言語学的側面だけでなく、口承文学やオーラルヒストリーの採録などについても大幅に遅れており、研究者の層が国内・国外を含めて非常に薄い状況にある。また、ペルーやボリビア国内では、国際協力と結びついた二言語教育等の実践的な観点からの考察は進みつつも、先住民言語に関する息の長い調査と研究が行われることは依然として困難な状況が存在している。

このような状況下で、本申請者は2009年度よりボリビアのラパス県農村部でのアイマラ語口承文学の調査を継続してきた。これまでは、ラパス県溪谷部のリオ・アバホ地域において、60歳代から80歳代のアイマラ語がスペイン語よりも堪能な話者の方々より、現地では話されている話を語ってもらい、それを採録する形で調査を行ってきた。この調査を通じて、アイマラ語圏で特に重要な存在である蛇を主要な登場人物とする話において、これまでにアイマラ語で採録されたことはない話のパターンや、その地域ならではの現実と結びついた話の形が存在していることを明らかになった。また、様々な異形の存在との遭遇についての話がそれ自体で一つの重要なまとまりを構成していることが明らかになり、また動物を主人公とする従来からよく知られている話についても、その類話を採録することができている。ここまでの調査については、アイマラ語の口承文学が現実と密接な関係を保ちながら語られているという観点から、現地における学会報告で成果を発表してきた。

また、上記調査を進めるうちに、ラパス県高原部における20世紀前半の先住民運動について、貴重なアイマラ語のオーラルヒストリー資料が散逸を免れて存在していることに気付くこととなった。19世紀後半からボリビアでも自由主義の時代が始まり、土地の個人所有化の推進という形をとりつつ、先住民共有地の廃止と都市支配階層による農村部の土地の獲得の動きが進んでいたが、その際に先住民共有地を守ることを先住民指導者らカシーケス・アポデラドスによる運動が形成され、アンデス高原部および溪谷部で大きな影響力をもった。この運動の最大の指導者の一人であるサン

トス・マルカ・トーラ及びその周辺の指導者らについて、その子孫や当時若い世代で書記として活動を助けていた者たちに対し、1980年代に大がかりなインタビュー作業がアンデス・オーラルヒストリー・ワークショップという団体によって行われていたが、ある程度までの編集作業が進んだのち、組織の内紛もあり、この豊富な資料はそのごく一部しかこれまでに公開されることはなかった。この散逸しかかった書き起こし文字資料を2009年度に回復し、2011年度及び2012年度にその整理及びスペイン語への翻訳作業を、同組織のアイマラ先住民メンバーの一部と進めてきた。2012年度には、その試論的な分析とオリジナル資料の一部を現地で刊行することができた。

2. 研究の目的

本研究では、南米アンデス高原部の先住民言語アイマラ語について、その口承文学の収集及び文字化作業と、20世紀前半のアイマラ先住民運動に関するアイマラ語のオーラルヒストリー資料の回復と整理の作業とを行うことを目的とした。

資料の収集・整備・回復の作業は現地のアイマラ先住民を中心とした組織と共同で進める。

続いて、その分析と刊行に向けた作業を行う。同資料は、ボリビアの大農園(アシエンダ)体制下での先住民の抵抗運動についての当事者見解を明らかにし、口承文学の現実との関わりや、オーラルヒストリーに組み込まれた神話的要素などについての、重要な知見をもたらすことが期待された。

3. 研究の方法

まず、アイマラ語の口承文学の研究については、継続的な話者とのコンタクトの下で、録音作業の継続にあたった。特に、ラパス県溪谷部のユーバンパ村及びメカパカ市での話者との共同作業は、7年を数えることとなり、単発の調査で終わることの多いアイマラ語の口承文学の調査としては、同一の話者との異例の長い作業が実現し、複数年を通じた話者の語りの内容の変遷や、アイマラ語口承文学のジャンルや語りの形成過程などについて、重要な知見を得ることができた。

なお、当初の研究計画では、口承文学とそれぞれの地域での儀礼の関係を明らかにする作業を行うことを主眼としており、特に本申請者がキリワヤ村で行ってきた調査では、ここまでにイリマニ山の雪解け水の灌漑を整備する過程での儀礼・祭礼が、人々の生活に大きな位置を占めており、口承文学においてもこの灌漑整備作業がモチーフ

として現れていることから、この側面での知見を深めることが重要な課題であったが、日本の大学の授業期間との関係でうまく調整が取れず、儀礼への訪問はいまだに果たせていない。

また、もう一つの課題として同地方では大農園（アシエンダ）の存在とその女性領主との関係が人々に記憶されており、口承文学とオーラルヒストリーの境界として語られる話が存在しており、同地域のアシエンダの 20 世紀における展開についても調査を行い、口承文学の理解を助けるための土台を構築する作業を行いたい、としていたが、こちらは文書資料が存在しない中で、過去の歴史を知る人物との人脈的つながりの構築に取り組んだが、いまだに成果を上げるには至らなかった。

次に、口承文学の調査範囲を広げ、エルアルト市の都市部において、アイマラ語専門のラジオ局における関係者から口承文学の採録を行うことを予定していたが、これは 2015 年度より同ラジオ局で民話の番組を長年担当してきた担当者より、筆者は独自の聞き取り作業を開始した。また、幾つかラジオ局でのかつての録音資料へのアクセスを許可され、これらと併せ検証することで農村とは異なった、より近代的な文脈におけるアイマラ語の使われ方や口承文学の語られ方についての考察を開始することができた。

また、回復と整理に取り組んできたアイマラ語のオーラルヒストリー資料については、当該組織とは別の博物館（ポリビア国立民族学・民俗学博物館）において元の音声データの一部が寄贈されて保存されていることが明らかになっており、その回復作業を進めるとともに、上記の編集されたアイマラ語のオーラルヒストリー文字資料との対応付けの作業を進めた。また、同資料における歴史語りは、プロテスタンティズムの影響とアイマラの世界観の双方の要素を併せもち、人物の活動史が口承文学のモチーフと不可分に語られるなどの複雑な様相を呈しており、他に類例を見ないものである。これらについて、その分析を進め、それぞれの要素の意義を解明する作業を続けた。

4. 研究成果

今般の助成を受けたことにより、アイマラ語の口承文学・歴史についての調査自体が進展するとともに、これまでの調査結果について、原文資料の整備・公開及びその分析の双方で重要な進展が得られた。

アイマラ語の口承文学については、上記方

法論の稿でも述べたように、同じ話者との聞き取り作業を継続することができ、約 8 年にわたり録音を重ねることで、アイマラ語の語り全般を語り手がどのように認識し分類しているかについて考察するための貴重な土台を構築することができた。また、アイマラ語のオーラルヒストリーについては、研究代表者が整理に関わっている 20 世紀前半のアイマラ先住民運動のオーラルヒストリーについて、1980 年代に口承史を語った者のうち一人が 90 台で現在も存命であることが確認され、本人を訪問し、3 時間を超す聞き取り調査を実施することができた。

原文資料については、アイマラ語原文の校訂及びスペイン語への翻訳を、アイマラ語の母語話者と共同で進め、また研究代表者が日本語への翻訳を進めた。これらの進展の一部を 2015 年度より原文対訳の形で公開することを開始した。また、既に粗訳が作成されていた資料についても、より精緻な翻訳と語学的問題の検討を進めることができた。

また、口承資料の分析についても、20 世紀前半のアイマラ先住民運動についてのアイマラ語オーラルヒストリー資料について、それが独自の歴史観に基づいて語られており、アンデス先住民から見たヨーロッパ植民地主義や、先住民運動の展開について、新たな認識のあり方を見て取ることができることが明らかになり、その重要性について、日本及び現地ポリビアの双方で学会発表を行い、併せて日本語論文の刊行を行った。また、アイマラ語資料は、多くのスペイン語からの「外来語」を含んでいるが、それはスペイン語の意味のままに用いられているわけではなく、アイマラ語に取り込まれた際に独自の意味と用法を獲得するに至っている。そのようなスペイン語起源の単語のアイマラ語化がもつ創発性を分析することに加え、それが口承の語りにもたらす文体的な特色が存在するのではないかとの示唆が得られ、これらの結果を国際シンポジウム場で発表を行い、そこで得られたフィードバックを元に論文化に向けた作業を進めている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 4 件)

藤田護、アイマラ語のオーラルヒストリーを「読む」試み—20 世紀初頭の南米ポリビア・アンデスにおけるカシーケス・アポデラードスの運動—、ODYSSEUS—東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻紀要、第 20 号、2016 年、pp.127-144

藤田護、南米ポリビアのラパス県溪谷部のアイマラ語口承テキストとその考察(1)—蛇の力を得た娘の伝承—、京都ラテンアメ

リカ研究所紀要、第 15 号、2016 年、
pp.115-152、査読付

研究者番号：50726346

藤田護、アイヌの散文説話における取り
組まれるべき課題(タスク)の構成、(中川
裕編)アイヌ語の文献学的研究(2)、千葉
大学大学院人文社会科学研究所研究プロジ
ェクト報告書、第 298 集、2016 年、pp.13-27

藤田護、ボリビア・アンデスにおけるア
イマラ語口承文学の躍動—ラパス市周辺の
渓谷部における語りから、イペロアメリカ
研究、第 36 巻第 1 号、2014 年、pp.27-51、
査読付

〔学会発表〕(計 4 件)

Mamoru FUJITA, Préstamos léxicos
hispanos en aymara: Análisis preliminar
de narraciones orales del altiplano
boliviano, Seminario internacional
"Dinámicas de contacto: Español y
lenguas amerindias," Universidad de
Tokio (Meguro, Tokio), 22 de noviembre
de 2015.

Mamoru FUJITA, La figura y el rol del
serpiente en la literatura aymara
contemporánea de Bolivia, oral y escrita,
Biannual Congress of Latin American
Studies Council of Asia and
Oceania(CELAO), Universidad de Kioto
(Kioto-shi, Kioto), 17 de septiembre de
2015.

Mamoru FUJITA, Retomando la
historia oral de los caciques apoderados:
Hacia la publicación de documentos
inéditos y su primer intento de lectur,
VIII Congreso Internacional de la
Asociación de Estudios Bolivianos, Casa
de la Libertad, Bolivia (Sucre, Sucre), 22
de julio de 2015.

藤田護、20 世紀初頭のボリビアのカシー
ケス・アポデラードスの運動に関するアイ
マラ語オーラルヒストリー資料の再評価、
日本ラテンアメリカ学会第 35 回大会、
2014 年 6 月 8 日、関西外国語大学(大阪
府枚方市)。

〔図書〕(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤田 護 (FUJITA, Mamoru)

慶應義塾大学・環境情報学部・講師